暮 ら し を 支 え る み な と の 情 報 誌 Vol.98 October 2021



**1** 月号

たを支える 時別寄稿 特別寄稿 「精神大学名誉教授」 清宮理



# 橋立一船主集落と漁港のまち一

#### はじめに

石川県の南端に位置する加賀市には、江戸時代から明治期に興隆した北前船主の集落が数多くあります。市南端の大聖寺川河口に位置する瀬越・塩屋、そして海岸線の中ほどにある橋立です。特に資料から確認できるだけでも41人の船主・船頭が居住した橋立は、一大船主集落でした。

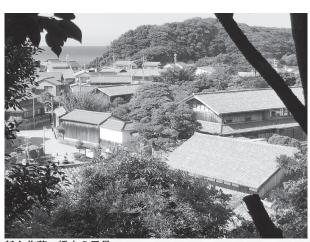
古くから漁業を行ってきた橋立の人々は船の扱いに長けており、江戸時代初期には近江商人が扱う船の乗組員として従事します。やがて独立すると自分たちの船をもって全国各地をまわり、商売を始めました。これが加賀地域における北前船のはじまりです。

### 船主集落の発展

橋立は明治期まで港が整備されておらず、大きな船が泊められなかったため、北前船の寄港地にはなりませんでした。春、船を預けている大阪へ船乗りたちは徒歩で向い、夏から秋にかけて航海に出かけ、冬に帰郷しました。航海の途中、橋立付近を通る際は沖に船を泊め、小舟で海岸まで寄って家族に会ったといいます。

北前船が市場を拡大し利益を伸ばしていくにつれ、船主が集う橋立も発展しました。特に天保期には廻船業が盛んになり、分家によっていっそう船主家が増え、新たな屋敷も建てられました。屋根は従来の茅葺きではなく赤瓦葺き。敷地内の石垣や石畳には福井県産の笏谷石が用いられました。瓦屋根の赤・石材の青が、橋立にしかない景観を生み出したのです。

明治5年(1872)には大火に見舞われて集落の 大部分が焼失しましたが、船主たちは全国から最 高級の材木を取り寄せ、より豪奢で大きな屋敷を 新たに建てました。



船主集落・橋立の風景

その後、陸上交通の発展や通信技術の普及により、明治末期に北前船は衰退します。しかし、旧船主家は大阪や北海道を拠点に新たな事業を興しています。大正時代の雑誌には橋立と瀬越が「日本一の富豪村」と紹介されており、その影響力は健在でした。

現在、橋立出身の北前船主・酒谷長兵衛の邸宅が「加賀市北前船の里資料館」として公開されています。集落には30棟もの船主・船頭の屋敷が残っており、北前船の栄華をいまに伝えています。

#### 漁港のまちへ

近代になり漁業が発達すると橋立地区にも港の必要性が高まり、大正12年(1923)に橋立漁港の防波堤建設が始まります。以後、約20年にわたり工事が行われ、膨大な工事費用の工面には旧北前船主家からの寄付もあり、昭和16年(1941)に船溜まり等を整備して橋立漁港が完成しました。

その後も改修を行い、昭和37年には第三種漁港に指定されたことをきっかけに規模を拡大し、新港の建設が行われました。今では、秋の底引網漁や冬の加能ガニ・香箱ガニの時期は特に港がにぎわい、加賀市を代表する産業となっています。



昭和初期の橋立漁港

## おわりに

橋立は海と関わりながら人々の生活が営まれてきました。やがて北前船が活躍し、集落を発展させ、近代には港が作られたことによって産業が発達しました。平成17年(2005)には船主集落の貴重な歴史的建造物や景観を守るため、国の重要伝統的建造物群保存地区として選定されています。北前船によって栄えた往時の様子を残す集落と近代的な漁港が並ぶ風景は、橋立の歴史そのものを表しています。